

## 「夜籠もり」の習俗にみる

### 秋田県金澤八幡宮の「掛唄」の性格

—奈良県立万葉文化館・一般展示室

「日本とアジアの歌」における基礎調査Ⅱ—

大谷 歩

#### 一 はじめに

奈良県立万葉文化館の一般展示室の「日本とアジアの歌」のコーナーでは、現代の東アジアに残る歌文化をビデオとパネルにおいて紹介している。これは、東アジアに残る歌掛けの習俗から、古代日本で行われていた歌垣のイメージを喚起させることを主眼とした展示である。筆者は、当該コーナーのビデオに収録されている秋田県の金澤八幡宮の「掛唄」についての調査報告<sup>1)</sup>を、『万葉古代学研究年報』第十七号において発表した。この報告は、金澤八幡宮の掛唄大会の古記録である「宵祭掛唄大会記録」に基づき、昭和十年代の掛唄大会について、自由唄・掛唄番組・順位・審査方法・掛け合いの方法などの項目から、過去の掛唄大会のおおよその状況を把握することを目的としたものである。このような調査報告を行った意図



一般展示室「日本とアジアの歌」パネル

た。本論は、今年度の二度の現地調査の結果を踏まえ、考察を加えた調査報告である。

金澤八幡宮<sup>2)</sup>は、秋田県横手市金沢字安本館の山頂に位置する社であり、この社のある丘陵は、後三年の役の戦場となった金沢柵と推定されている。金澤八幡宮の由来は、菅江真澄（一七五四～一八二九年）の『月の出羽道』によると、後三年の役で清原武衡・家衡に勝利した源義家が、国家鎮護のために石清水八幡宮を勧請したことが創建の由来であるという。『月の出羽道』卷十九「杜の真榊のまき 下」の該記事の一部を引用する。

出羽国山北の金澤山に座る八幡の御神は、そのいにしへ陸奥国守源義家朝臣、武衡、家衡をむけたひらげ給ひて後、なほ国鎮護のためとて、<sup>かしく</sup>恐も、ひろはたのいやはたの神をいつぎまつれ

は、当館の展示内容に関連する情報を収集することによって、利用者に新たな情報を提供するとともに、学術的にも貴重な歌文化の記録にも資するものと考えたためである。そのため、今年度は改めて現地に赴き調査を行っ



金澤八幡宮・鳥居 (横手市金沢)

り。それは、まくさ刈る鎌倉山のおほみ神也。其由来は、相模国鶴岡者、後冷泉院時源頼義奉勅伐安倍貞任、康平六年八月勸請石清水、建宮於相模国由比郷、永保元年源義家修理之〔今号曰下若宮〕治承四年十月源頼朝遷之於小林郷之北山といへり。また、石清水のいやはたの宮とまをし奉るは、清和天皇貞観元年、大安寺沙門行教奏聞之、自豊前宇佐移之於山城国男山鶴峯、所謂八幡大菩薩即応神天皇是也。〔行教者武内宿禰之苗裔也。〕とぞ見えたる。<sup>(3)</sup>

また、同じく『月の出羽道』卷十九の「羽陽金澤山八幡神社記」

によると、本尊は「神殿安置於阿彌陀之佛像〔金像長可三寸〕也、是乃被納義家將軍之守護本尊也云々<sup>(4)</sup>」であるといい、現在の祭神は、「息長帯姫命・菅田別尊・玉依比売命のほか、明治四十年(一九〇七)以降に合祀された諸社の祭神六柱である<sup>(5)</sup>」という。現在では、毎年九月十四日の宵宮祭の夜から、例大祭当日である

十五日の明け方にかけて、境内で金澤八幡宮伝統掛唄大会が行われており、この行事は平成四(一九九二)年に秋田県無形民俗文化財に指定されている。ただし、金澤八幡宮における掛唄の記録は『月の出羽道』にはみえず、現在に続く掛唄の発生は明治以降であろうと推測されている<sup>(6)</sup>。しかし、『月の出羽道』の仙北郡編は、文政九年五月より同十二年九月にかけて編纂されており、金澤八幡宮に関する江戸時代の記録としては極めて貴重なものである。また、菅江真澄の秋田県内の紀行文である『小野のふるさと』には、野遊びにおいて歌に興じる人々の様子が描写されている。金澤八幡宮の掛唄に直接的な関わりはないが、江戸時代の秋田地域における歌遊びの一端を垣間見ることができ資料も存している<sup>(8)</sup>。

現在の掛唄の発生に関連すると思われる記事としては、『月の出羽道』卷十九の「金澤山四箇村ノ総鎮守八幡太神宮年中行事式並末社恒例之神事社式」の八月十四日の項に「齋夜也」とあり、九月十四日の項には「御扉閉、献神酒神供神式如恒例。村民氏子参詣、村民みな齋籠<sup>(いこもり)</sup>ある也」との記録がみえており、九月十四日あるいはその前月の祭礼日に「夜籠もり」の習俗が行われていたようである。金澤八幡宮伝統掛唄保存会第二代会長の伊藤金之助氏は、金澤八幡宮の掛唄の発生について、仙北地方の「社ごもり」の風習との関連について次のように述べている。

金澤八幡宮の場合は、この「社ごもり」が何時の頃からか、結

婚前の娘が宵宮の折りに「お籠り」とすると、良縁が得られると信じられるようになった。しかし若い娘が一人では心許ないので、親族や知人が同行し、お籠りが終わるのを待ちながら酒などで酌み交わしながら、お互いに唄に興じたのが金沢八幡宮の掛唄の始まりで、自然発生と見られる<sup>10)</sup>。

伊藤氏が述べるように、金澤八幡宮の掛唄の発生に「社こもり」、「夜籠もり」の習俗が関係するというのが現在の通説となっており、『月の出羽道』の「齋夜」「齋籠」の記述との関連性が示唆される（詳細は後述）。現在行われている金澤八幡宮の掛唄がたとえ明治以降に発生したものであったとしても、夜に社に籠もるといふ江戸時代以来の習俗が掛唄の発生に関与しているという文化現象の存在は見逃ごせないものであり、人間が「歌を掛けあう」といふ文化を獲得する道筋を考察する一つの手がかりとなるものと思われる。本論では、「夜籠もり」といふ習俗と掛唄との関係を考察し、さらに、現在の掛唄大会が宵宮祭の日に行われ、かつ宵宮祭の神事で掛唄を奉納することという行事のあることなどに注目し、金澤八幡宮の掛唄の性格について論じてみたい。

## 二 「仙北荷方節」について

現在行われている金澤八幡宮の掛唄大会は、「仙北荷方節」（以下「荷

方節」とする）という七七五調の曲にあわせて、歌い手同士が即興で歌詞を作って歌を掛け合うことが特徴である。白田甚五郎氏が昭和四十三年八月に伊藤金之助氏に聞き取りをした内容によると、以前は「生保内節」や「荷方節」がうたわれており、明治年間に神社の前で掛唄が行われるようになった頃から「荷方節」一本にまとめられたという報告がなされている<sup>11)</sup>。北嶋泰治氏は「荷方節」と掛唄について、

相手の作った言葉に対し、また相手の唄う節に合わせて、掛合うようになったのは、明治末から、大正初期にかけてのことであり、これをハッキリ今日の「金沢山八幡神社の掛唄は荷方節に限る」とされたのは、昭和に入ってから、即ち神社全改築の後である<sup>12)</sup>。

と述べている。社の全改築が行われたのは大正十五（一九二六）年のことであり、福田久四郎氏によれば、この改築を記念して昭和二（一九二七）年九月の例祭の際に、金沢町荒町の中村源助氏が掛唄大会のために初めて優勝旗を作ったという<sup>13)</sup>。すなわち、金澤八幡宮における掛唄が大会として行われるようになったと考えられる時期と、北嶋氏が「荷方節」に限定された指摘する時期とはおおむね一致するのである。なお、秋田県教育委員会の報告によると、

現在、歌を掛け合うのに「荷方節」が用いられている。この曲が使われたのがいつごろからなのか特定はできないものの、



熊野神社 (美郷町六郷)

ていた事例については後に述べることにするが、「荷方節」に統一された時期については諸説が存する。現在、金澤八幡宮以外で掛唄が行われているのは、仙北郡美郷町六郷の熊野神社の祭礼における掛唄大会のみであり、熊野神社においても「荷方節」で行われている。熊野神社の掛唄については、昭和二十八(一九五三)年に社殿が火事で焼失して再建され、その復興のために掛唄大会を開催した旨を、熊野神社の熊谷暁宮司夫人・熊谷真利氏よりうかがった(平成三十一年六月二十六日調査)。秋田県教育委員会の報告では、熊野神社の掛唄が始められたのは一九五五年ごろのことであるといい、ま

大正期以降であろうことは、それ以前に行われていて一九五〇年代(昭和三〇年前後)までに消滅した掛唄歌が行われていた神社の祭礼などに「荷方節」が使われていないことからもおおよそ察しはつく。(六五頁)

とあり、金澤八幡宮以外の神社で過去に掛唄が行われ

た現在に残る掛唄が「荷方節」のみであることについては、

「荷方節」が掛け歌に使われるようになった一九五〇年代以降でも、荷方節の曲調には少なからず変化が見られる。言葉、歌詞が重視され、歌い回しが自由に変化できるこの曲は、詞の半ばでもエーエ、アーアと長く伸ばせることによって次の問いかけへの間や答えへの時間が得られるという利点があることが、掛け歌全体が「荷方節」に整えられたということの最も大きな要因だろうと考えられる。(七四頁)

とされている。たしかに、「荷方節」の節まわしなどは歌い手によって多少異なる場合もあり、おおむね一曲に一分から一分半程度を要するため、掛け合う相手の歌詞の内容をある程度予測しつつ、さらに自らの返答を考えながら相手のうたい終わりを待つことができるという利点についての指摘は首肯される。また、「荷方節」は七七七五調を基本としているが、実際の歌詞は必ずしも七七七五の音数ではなく、時には字余りや字足らずが起り、歌詞の文字数もある程度融通が利くようである。ただし、長年金澤八幡宮伝統掛唄保存会会長として審査を行っていた加藤義男氏(現金澤八幡宮伝統掛唄保存会顧問)への聞き取りによると、大幅な字余りや字足らずは大会の審査においては減点の対象になるとのことであった(平成二十七年六月二十四日調査)。

この「荷方節」は、本来は「にいがた(新潟)節」であり、『日本

民謡大観』によると、全国に分布している「松坂」という民謡を、秋田・岩手・青森の三県では「荷方節」と呼んでいるという。

元来「にかた節」は「にいがた節」の詰つたもので本字で書けば「新潟節」なので、その語源は新潟方面から伝はつて来た唄と云ふよりは、新潟出てから昨日今日で七日、とか、新潟出てから未だ帯とかぬ、等唄ひ出しに新潟と云ふ文句を持つ唄だつたので誰れが云ふとなく一口に新潟節と呼ぶやうになり、それが清音化して「にかた節」となつたのである。然るに現在では何人のさかしら、か荷方と云ふ漢字を当嵌めて書くやうになつたので、何か荷物でも運搬する時の労働歌のやうに誤解されるに至つた。即ち「松坂」が座頭や瞽女によつて陸地続きに伝はつて来たその後何十年かと経た後に、今度は、新潟云々と云ふ歌詞を持つ「松坂節」を新潟辺の船頭が海の方面から山形、秋田方面の船着場へ運んで来たのが新潟節即ち「にかた節」として再流行したのである。

『秋田県史』は、「荷方節」の「元唄は松坂検校によつて創始され」、旅の遊芸人によつて持ち込まれた「祝唄」であり、「ボサマ（座頭）盲の意の三味線で県内ひろく流行したときがあつたとおもわれる」と述べている。これらの見解から、歌詞に「新潟」の語を持つ民謡「松坂」が、海運業の隆盛によつて新潟方面からもたらされて、秋田・岩手・青森地域に広まったのが「荷方節」であり、本来は祝歌

としての性格を有していたと理解されよう。また、秋田県内においては、「荷方節」はそれぞれの地域によつて「仙北荷方」「秋田荷方」「松坂荷方」「本荘荷方」などと名称が異なり、「内陸に深く入るにしがたつて、曲節は技巧的になり複雑化してきた」との指摘もある。『復刻 日本民謡大観』は、仙北地方の「荷方節」と南秋田地方の「荷方節」の歌詞を紹介し、

「にかた節」は持込まれた時は双方同じように祝唄だつたと思われるが、仙北郡下では掛唄に用いられたため、歌詞を即興で作らうことの方に興味が移つていった。一方秋田市周辺では祝唄として、座敷の技巧的なうたい方が中心になつていった。と解説している。『復刻 日本民謡大観』も「荷方節」に祝歌としての性格を認めており、南秋田地方の「荷方節」は座敷唄として展開したことが示唆されている。この座敷唄という性格について、秋田県教育委員会は南秋田地方に限らず、「荷方節」全体を捉えて次のように報告している。

「荷方節」は三味線がその基本的なメロディを奏することによつて座敷唄となつたと考えてもいいようだ。単純な詞型をストリートに歌わずに合の手を入れたり引きのばす唱法によつて、祝歌のおごそかな雰囲気や大勢が声を合わせて歌うスタイルに整えられ、宴席では欠くことの出来ぬ曲に移つていったものであろう。（六六頁）

このように、掛唄に用いられる前段階の、本来の民謡としての「荷方節」は祝歌としての性格を有しており、それは座敷唄として宴席の場であつたものであつたとみなされる。その歌詞の内容も祝歌にふさわしいめでたい内容をうたうものが多い。秋田県教育委員会が採集した「現在まで歌い継がれている『荷方節』の歌詞」によると、次のような歌詞をみることができる。

- 1 今日(けふ)は吉日(きちじつ)日柄(ひがら)もよいし 何か(なに)よろずの吉左(きちざ)右祝(みづかひ)
  - 2 元日(元日)に鶴(つる)の音出(ねで)すあの井戸車(いどぐるま) かめに(かめに)くみこむ若(わか)の水(みづ)
  - 3 声(こゑ)はすれども姿(すがた)は見えぬ やぶ(やぶ)に鶯(うぐいす)声(こゑ)ばかり
  - 4 ながたいつくる今(いま)月末(げつまつ)に 延び(のび)て来(き)月(つき)二日(ふたひ)頃(ころ)
- (中略) 地域的には県南部が多いのだが、男鹿市では大漁の祝い歌として歌われたり、由利では祝い歌として、仙北では座敷唄として歌われることが多いようだ。

(七二頁 ※歌詞の番号は便宜上筆者が付した。)

また加藤義男氏から提供していただいた「荷方節」の歌詞の一覧には、次の六首が取り上げられていた(令和元年六月二十七日調査時に入手。歌詞の番号は便宜上筆者が付した)。

- 5 今日(けふ)は 吉日(きちじつ) 日柄(ひがら)もよいし 何か(なに)よろずの吉左(きちざ)右祝(みづかひ)
- 6 梅(うめ)の 匂(にお)いを 桜(さくら)にこめて しだれ柳(しだれやなぎ)に 咲(さ)かせたい
- 7 駒(こま)に またがり たんぼに行(い)けば 稼(か)ぐおぼこの 荷方(かたがた)節(ふし)
- 8 高い お山(おやま)の 御殿(ごてん)の桜(さくら) 枝(えだ)は七枝(ななえだ) 八重(やえ)に咲(さ)く

- 9 お酒(おさけ) 飲む(のむ)人(ひと) 花(はな)ならつぼみ 今日(けふ)も咲(さ)け咲(さ)け 明日(あした)も咲(さ)け

- 10 お酒(おさけ) 飲む(のむ)人(ひと) 万年(まねん)生きる(いきる) そこで酒(さけ)飲み(のみ) 亀(かめ)という(いふ)

「荷方節」の中でもっとも代表的な歌詞が1および5の歌詞である。「吉左右祝い」の語は、明確な意味は不明であるが、「吉相祝い」(三吉節)、「基礎祝い」(梵天唄)などともされ、歌が披露される場の主旨にふさわしい意味として流動的に用いられ、解釈されているようである。この1・5や6の歌詞は、現在の金澤八幡宮の掛唄大会においても、相手への返し歌に窮した時に持ち出される歌詞であり、筆者も実際の大会で幾度か遭遇したことのある歌詞である。掛唄大会においては、相手の歌に対してうたい返すことがまず優先されるため、返しに窮した時にこれらの伝統歌詞で乗り切るというテクニクが存するのである。また、1・5の歌詞は祝歌として一般的な内容を有しているために、掛唄のうたい始めでもうたわれる場合がある。このように場を開いていく祝歌としての性格は、「荷方節」という民謡本来の性格でもあり、また掛唄の場においても引き継がれて機能しているといえるのである。

### 三 夜籠もりの習俗と掛唄

冒頭にも述べたように、金澤八幡宮の掛唄の発生には夜籠もり

の習俗が関係していると目される。辻純一氏は、「明治十年頃から旧八月十四日に神社の長床に未婚の娘を夜籠させる風習があった」、「両親がつき添って一升ビンに煮しめの重箱でお互いはなやかな交歓をし、飲むほどに出てくるのが荷方節である。そしてお互いに即興の文句で問答がはじまり、そのやりとりとなる」といい、明治初期には娘の良縁祈願としての夜籠もりと、それに伴って荷方節による掛唄が行われていたと述べている。金澤八幡宮の夜籠もりに関すると思われる記録は、菅江真澄の『月の出羽道』巻十九「金澤山四箇村ノ総鎮守八幡太神宮年中行事式並末社恒例之神事社式」の八月十四日の項に、次のようにみえる。

齋夜也、献御饌、神酒、榊、松、竹、御紋ノ神燈八張、神前と第一ノ鶏栖に是を懸て照らして奉る也。また其処々の寄附の神燈三十斗、神阪に是をかけて奉れり。丑ノ刻神楽を奏す、一社の神秘行事あり。天下泰平、国家安穩、当国君御武運長久、御寿齡長延、御家門御家中御安全、<sup>次</sup>郷中万民繁栄御祈禱加持。

また、『月の出羽道』巻十九「仙北郡金澤前郷村八幡宮ノ社録」には「例祭 小祭四月十五日、大祭八月十五日也」とあることから、この「斎夜」は例大祭の宵宮のことを指すものであろう。宵宮では、神饌・神酒・榊・松・竹、紋付の神燈八張を神前と「鶏栖（鳥居）」にかけて照らし、また神燈を阪に灯し、丑の刻に神楽を奏して「神

秘行事」を行うとあり、これは天下太平、郷中の万民の繁栄を願う加持祈祷であるという。この「神秘行事」がどのような行事であるかは不明であるが、『月の出羽道』巻十七の「金澤本町邑」の記録には、八月朔から十五日の大祭までは「金澤元町、金澤中町、金澤東根、金澤西根四村殺生禁断にて鳥獸を喰はず、又死人を葬らず、他村へ埋め葬する也」とあり、ただし菅江真澄はこの四村は「本町・中野・前郷・寺田」であると訂正している。引用部の続きには、このような潔斎期間は八月朔から十五日の大祭までの間と、正月の十五日前までとあることから、「斎夜」である八月十四日は、一年間の中の特別な潔斎期間の最後の夜であるといえる。

つづいて、「金澤山四箇村ノ総鎮守八幡太神宮年中行事式並末社恒例之神事社式」の九月十四日の項には、次のようにみえる。

御扉閉、献神酒神供、神式如恒例。村民氏子参詣、村民みな齋籠ある也。

ここには、恒例の神祀りのように、社の御扉を閉じ、神酒や神饌を供え、村民・氏子が参詣し、村民はみな忌み籠もるのだとある。このような夜籠もりの目的として、前掲の伊藤金之助氏は嫁入り前の娘の良縁祈願であったと述べていた。赤松啓介氏は、十三歳という年齢は子供と成人との一つの区切りの年齢であり、本来女子の場合には初潮の有無により判断されていたが、十三歳を区切りとして儀礼を行うことで、みな等しく成人の扱いを受けるよう徐々に配慮さ

れた経緯を述べている。<sup>(22)</sup>このことから推測すれば、十三歳という年齢は娘たちが結婚を意識しはじめる年齢であるといえる。この十三歳という年齢を考える時、たとえば「十三参り」という習俗が思い起こされる。「十三参り」について、『精選 日本民俗辞典』の説明を引用しておく。

十三歳になった男女児が厄落とし、開運・知恵授け・福貫のために虚空蔵に参る行事。京都法輪寺、茨城県東海村村松虚空蔵堂、福島県柳津町円蔵寺虚空蔵堂など、主に近畿や東北地方南部の虚空蔵寺堂にみられる。京都地方などでは、この時に女子は四つ身から本裁の着物を着ることから、地域の成人儀礼が知恵増進・開運、十三に関係深い虚空蔵菩薩の利益に結び付き、虚空蔵寺堂の行事に収斂されていたと考えられる。(中略)十三歳は成人の前段階として大事な年回りであり、女子の十三歳がまた、女子の厄年でもあることからこの年に行われた十三祝いが寺院行事としての十三参りに展開していったので、同じ十三参りでも京都などの都市と東北などの農村とではその成立・内容に差異がある。<sup>(23)</sup>(下略)

十三歳は成人を目前にした年齢であり、良縁祈願を行うのに適した年頃であると推測される。菅江真澄が記録した江戸時代の夜籠もりは、対象者が限定されていないことから集落全体の行事であった可能性があるが、明治以降、特に十三歳を迎えた娘の良縁祈願とし

て夜籠もりが行われたことは十分に考え得ることである。さらに、『精選 日本民俗辞典』が例に挙げた福島県柳津町円蔵寺虚空蔵堂においては、現在の九月三十日(陰暦の八月晦日)に「九月堂お籠もり」として、信者が参籠して虚空蔵尊に祈願する行事があり、この時に歌を掛け合う遊技も行われているという。宮崎隆氏は、神社の祭祀において掛唄が行われている事例として「会津の柳津虚空蔵の『歌げい』」などを指摘しているが、「これら素朴な『掛唄』は、全国的に衰微してしまい、現行のものは存在しない」と述べている。<sup>(24)</sup>現在の虚空蔵堂の「九月堂お籠もり」は十三参りとは別の行事であるが、夜籠もりにおいて掛唄がうたわれる一つの事例として注目される。また、齋藤壽胤氏が「宮城県の定義節や福島県の玄如節・羽黒節などは、もともと夜籠りの時に必ず唄われて、やがて掛け合いのうたとして広まったといわれる」と述べるように、掛唄と夜籠もりには密接な関係があるように思われるのである。

さらに、秋田県内においても、夜籠もりの習俗において掛唄が行われた事例が報告されている。秋田県教育委員会によると、田沢湖南の大蔵山の観音堂で、一九四〇年頃まで夜籠もりが行われていたとあり、「この観音堂の信仰範囲は仙北と岩手県雫石地方に及んでいて、旧暦七月九日の祭礼の夜には『籠もり』の人たちが訪れた。ここでは籠もりの夜は、民謡の交流の夜でもあった」(七六〜七頁)といい、齋藤壽胤氏は「柳津の虚空蔵堂境内で秋九月に催されたウ

タゲ(うた巻)というのは、大勢の男女が集まりうたの掛け合いであった<sup>(26)</sup>が、一九四五年以前に途絶えたと報告している。この大蔵山の観音堂の掛唄については、宮崎隆氏編の「宮田熟穂資料 昭和初期の『掛唄』蒐集ノート」に歌詞の記録がある。藤田秀司氏の「金沢八幡神社の掛け唄」の末尾の編集部による記事には「田沢湖町大蔵観音の掛け唄は、平成七年八月七日同町院内岳(七五メートル)中腹にあった大蔵神社が三キロ離れた鳥居野へ移転改築を機会に掛け唄大会を復活し披露した。昭和二十七年以来四十三年ぶりの再現である<sup>(28)</sup>」とあるが、その後継続されたという記録や報告はみられない。

この他、『日本民謡大観』は秋田の「お山節」(院内節)について、仙北郡の田沢湖を背にして聳えてゐる神代村字院内の大蔵山の<sup>(27)</sup>中腹に祀られてゐる観音様の祭りが毎年旧七月九日に催される。その八日の晩に夜籠りをしてゐる参詣人によつて徹宵して諷はれるもので又の名を「院内節」とも呼んでゐる<sup>(29)</sup>。

と紹介しており、また山本郡二ツ井町の「高岩節」については、高岩寺の祭りに集まった信者達が、夜籠りをする時、「掛唄」に用いた。(中略)多分祭礼の祝唄としてうたっていたものが定着したのだろう。

と解説している。秋田県教育委員会は、「過去に掛け歌が行われていた神社」(十一頁)として、次の神社を挙げている。

鹿角市八幡平 大日靈貴神社



【図】 秋田県の掛唄関係神社分布図

※加藤義男氏作成「秋田県で過去に掛け唄が行われていた神社分布図」を参照して作図<sup>(31)</sup>

- |          |            |
|----------|------------|
| 角館町下延    | 榎館神社       |
| 西木村下檜木内  | 御座石神社      |
| 田沢湖町神代岡崎 | 大蔵神社       |
| 田沢湖町田沢   | 鳩峰神社       |
| 中仙町豊川    | 水神社(米沢観音)  |
| 中仙町清水沖ノ郷 | 八坂神社       |
| 大曲市蛭川    | 薬師神社       |
| 横手市大沢    | 旭岡山神社      |
| 大森町八沢木   | 保呂羽山波宇志別神社 |



旭岡山神社 (横浜市大沢)

東成瀬村手倉 盛合神社 (旧八幡神社)

藤田秀司氏は「古いかげ唄は田沢湖町院内の大蔵山、中仙町豊川の観音堂、千畑町松原、田沢湖町御座石、大曲市蛭川、横手市旭岡山、大森町八沢木、東成瀬村手倉地域等にもあったと報ぜられている」という。御座石神社の掛唄については、加藤義男氏への聞き取りによれば、加藤氏の父と知人も田沢湖の御座石神社で掛唄が行われていたと話していたとのことであった(令和元年六月二十七日調査)。また、梵天祭りで有名な旭岡山神社の「御由緒書」の看板には、八月九日の丑刻詣祭の欄に「かけ唄奉納」と記されており、公

立大学法人国際教養大学  
地域環境研究センターの  
「秋田民俗芸能アーカイ  
ブス」(<http://www.akita-minzoku-geino.jp/>)におい  
て「旭岡山神社丑刻詣掛唄  
奉納祭(露踏神事)」として  
紹介されている。加藤義男  
氏への聞き取りによると、  
この掛唄はのど自慢的要素  
が強く、歌の掛け合いはな  
されていないとのことだ

あった(令和元年六月二十七日調査)。しかし、掛唄と神事、しかも夜籠もりのように夜半に行われる神事において唄を奉納するという点では、掛唄と夜籠もりの深い関係性をうかがわせるものであろう。このように、秋田県内においては夜籠もりにおいて掛唄が行われていた事例を確認することができ、それらは神社の祭礼日に行われる傾向にあることがうかがえる。これは夜籠もりと掛唄が、神事とおして結びついていることを示しているものである。これは、神事において歌が奉納されるということ、また荷方節が本来的に祝歌の性格を有していることと重なる問題であると思われる。そこで、次に金澤八幡宮の宵宮祭で奉納される掛唄とその性格について考察してみたい。

#### 四 神事における奉納掛唄

金澤八幡宮の伝統奉納掛唄大会は、午後八時から始まる宵宮祭の後、午後九時半ごろから開始される。筆者は、令和元年九月十四日の宵宮祭について調査を行った。その際の宵宮祭の式次第は、次のとおりである。

- ・ 修祓
- ・ 宮司一拝
- ・ 神前で太鼓を奏上

・宮司による祝詞奏上

・扇と鈴の舞

・獅子舞

・剣舞

・餅（饅頭）まき

・玉串奉納

・宮司一拝

・掛唄大会参加者による奉納唄

この時に奉納された唄は掛唄ではなく歌い手による独唱であり、唄は掛唄大会で用いられるのと同様、荷方節によるものであった。令和元年度は三名の歌い手が神前で唄を奉納していた。

① 中川原信一氏

昭和平成 令和の御代も うたい続ける 掛唄よ

② 妻野敏夫氏

令和最初の 掛唄祭り 気持ちも新たに うたいます

③ 後藤弘氏

昭和と平成 令和とつなげて 五十三回目の 奉納です

加藤義男氏への聞き取りによると、毎年宵宮祭において奉納される唄の歌詞は記録していないが、この奉納唄の内容は歌い手が自由に創作するものであり、基本的には掛唄ではなく独唱であるという。ただし、前の人の唄をうけてうたう人もいるとのことであった（令



金澤八幡宮・社殿内（宵宮祭前）

賞<sup>33</sup>して以来、近年の大会の常連であり、今年度の大会では優勝を飾った。この度の奉納唄は、元号が平成から令和に改まったことにより、三名とも「令和」を取り上げている。中川原氏・後藤氏は昭和時代からの参加者であることから、昭和・平成・令和の三代をとおしてうたい継いできたことを話題とし、妻野氏も令和初年度の大会であることから心機一転の心持ちをうたっている。

この宵宮祭の奉納唄については秋田県教育委員会の平成九年度の記録にその歌詞が記録されており、四名の唄が奉納されたとある。

○川村与七郎氏

和元年六月二十七日調査。後藤氏は「五十三回目の奉納です」とうたっているように、五十年以上この大会に参加し続けており、中川原氏も後藤氏に続いて古くから出場している前年度の優勝者である。後藤氏と中川原氏は度々優勝している、本大会を代表するベテランの歌い手である。妻野氏も昭和六十二年に新人賞を受

今年も社に参ってかける 掛ける掛け唄 楽しみに

○後藤 弘氏

今日は吉日 社の祭り 荷がた 唄って夜を明かす

○佐藤芳弘氏

このや 社はめでたい社 千代に八千代に栄ゆく

○藤峯ノコさん

今年や大旗(優勝旗)と二人で登り 短い一年楽しかった

この四名も掛唄大会の優勝者や常連のベテランであり、藤峯氏は前年度の優勝者、佐藤氏は平成九年度の優勝者である。後藤氏の唄の冒頭「今日は吉日」は荷方節の伝統歌詞である「今日は吉日 日柄もよいし 何かよろずの 吉左右祝い」を利用したものであろう。この四名の唄はあくまでも独唱であるが、川村氏が八幡宮での掛唄大会への期待をうたい、次の後藤氏が川村氏の「社」というキーワードに呼応して、伝統歌詞を用いながら「社の祭り」と夜通し行われる掛唄大会を寿ぎ、佐藤氏は後藤氏の「社の祭り」を受けて八幡宮の祭典にふさわしく、社の繁栄を願う内容である。最後の藤峯氏は前年度の優勝者としての思いを述べている。

この宵宮祭における奉納唄によって祭典は終了し、午後九時半からの伝統奉納掛唄大会へと移行してゆく。この奉納唄は、いわば大会の開催を神前に報告して大会の開幕を宣言し、大会の盛会を予祝する役割を果たしているといえよう。

### 五 令和元年度の金澤八幡宮奉納伝統掛唄大会

令和元年度の金澤八幡宮奉納伝統掛唄大会は、九月十四日(土)から十五日(日)の明け方にかけて開催された。以下、現地における調査記録である。すべての掛唄に言及することはできないが、適宜必要な情報を補い、所見を述べておくこととする。

- 19時3分 ジュニア部門(7名)
- 19時20分 ジュニア部門表彰式
- 20時0分 金澤八幡宮宵祭 神事
- 21時33分 功労賞 表彰式 伊野義博氏(十一年出場の功績)
- 21時50分 優勝旗返還 昨年度優勝者 中川原信一氏
- 22時26分 デモンストレーション・夫婦対決
- 中川原恵美子氏(エ)と中川原信一氏(ナ)の夫婦対決
- エ…ゆうべ見た夢 叶うように 八幡様に 願かけたよ
- ナ…何を願うか 知らないけれど あまりいじめは しないでよ
- エ…仕事熱心は 嬉しいけれど たまにゃのんびり 旅もしたい
- ナ…仕事するのと 掛唄出るのは それが私の 楽しみだ
- 22時34分 大学生部門 表彰式

22時46分 一般の部・一回戦

【1組目】高柳理乃氏（夕）／中川原信一氏（ナ）

タ…今年たくさん 花火を見たよ 初の長岡 大曲

ナ…花火見るなら 秋田がいいよ 大曲の花火は 日本一

タ…私死んだら 花火になりたい 夏の秋田に 打ち上げれ

ナ…夏の花火を 楽しくながめ 秋は掛唄 うたいましよう

【2組目】風間さくら氏（カ）／妻野敏夫氏（ツ）

カ…令和はじめての 掛唄大会 あらたな歴史を 作ってく

ツ…令和開幕 掛唄祭り ともに元気に うたいましよう

カ…私幸せ こんなにすてきな 名人さんと うたえるの

ツ…若いあなたと 並んでいると 心ときめき 目がくらむ

【3組目】木村テル子氏（キ）／後藤弘氏（コ）

キ…今日は吉日 きちよち 日からも良いし なにかよろずの きそ祝い

コ…決まり歌詞では 掛けにはならぬ あれほど教えても まだ

まだだめか

キ…梅のにおいを 桜にこめて しだれ柳に 咲かせたい

コ…しだれ桜は みごとな花だ あなたもそのように かけの花  
を

木村氏は後藤氏の民謡の弟子で、師弟対決となった。木村氏の歌

詞はいずれも仙北荷方節の伝統歌詞であるため、即興の歌詞ではない。後藤氏の「決まり歌詞では」はそのことを指している。ただし、

後藤氏の二回目の唄では、伝統歌詞の「桜」を承けて木村氏へのエールへと転換しており、この機転が即興の掛唄に求められる重要な能力であり、歌を掛け合う時の技術であるといえる。

【4組目】梶丸岳氏（カ）／村田定夫氏（ム）

カ…今日の祭りは にぎわいあるよ 人がたくさん 来てくれた

ム…なんぼもの好き 京都から 来てくれた 京大の学長よ

カ…俺はまだまだ 若すぎだ 京大の学長 ほど遠いぞ

ム…それじゃ務まらない 京大の教授には 掛唄しつかり 覚え

ていけよ

梶丸氏は京都大学の助教で、毎年当該大会に調査に入り、歌い手としても参加している。そのため、大会常連の村田氏は梶丸氏が京大の大学の教員であることを知っているのである。そのことから出た「京大の学長」という戯れの内容である。

【5組目】小林優香氏（コ）／中川原恵美子氏（エ）

コ…今日は増田で 散策しながら 秋田のみやげ 探したよ

エ…秋田みやげは たくさんあるよ 金澤八幡 掛唄もね

コ…みやげたくさん でも金足りない ここでいっぱい もらい  
たい

エ…みやげたくさん さっきいただき まだまだ欲しいとは 欲  
張りね

小林氏はN大学の学生で、大学生部門にも出場している。大学生  
部門の表彰式では記念品を多く授与されており、中川原氏の「みや  
げたくさん さっきいただき」とは、そのことを指している。

【6組目】伊藤葵氏(仆) / 伊野義博氏(仇)

仆…今日は私の 誕生日よ 祝ってほしいな あなたに

仇…月のきれいな 八幡さんで あなたとうたう 嬉しさよ

仆…同じよあなたと ここでうたえて 最高の誕生日に なった

仇…うれしい喜び 戻ってきて横手に 再びうたう 掛唄よ

23時28分 一回戦終了・審査

23時55分 一般の部・二回戦

【1組目】風間さくら氏(カ) / 中川原信一氏(ナ)

カ…私食べるの 大好きなのよ 横手焼きそば いっぱい食べた  
いな

ナ…横手焼きそば 食べたいならば お腹いっぱい ごちそうす

る

カ…それは嬉しいな でもね実は みんな一皿 私一皿しか食べ  
ませんよ

ナ…別に遠慮は いらなですよ 金ならいっぱい あるオレだ  
カ…それならたくさん 食べたいな お腹いっぱい いただきま  
す

ナ…それは何より 安心したよ お腹いっぱい 食べてくれ

【2組目】高柳理乃氏(夕) / 妻野敏夫氏(ツ)

夕…私誓うわ トイレに行かぬ 下のトイレは 虫だらけ

ツ…虫が怖くて 生きてはいけぬ そんな弱虫 飛んでゆけ

夕…虫が得意な 男でないと 私結婚 できないのよ

ツ…若いあなたに 彼氏はないか あれもやっぱり 悪い虫

夕…芯が強くて 尊敬できる そんな彼氏が 欲しいのよね

ツ…今のあなたは 学生だから 勉強第一 がんばって

「下のトイレ」は、神社境内から坂を下った先にある公衆トイレ  
のこと。トイレの虫が話題となっているが、妻野氏の二回目の唄で  
は、若い女性にちよつかいを出す男を「悪い虫」と譬喩するように、  
「トイレの虫」↓「悪い虫」↓「彼氏」という発想の転換がなされ  
ている。このように、相手の歌詞を承けながら新しい展開へと歌を  
導いていくのが歌い手の技量であり、ベテランの歌い手ほどこのよ

うな技に長けているように見受けられる。

【3組目】 梶丸岳氏（カ）／伊野義博氏（イ）

カ…昼間暑くて 疲れたけれど 夜は寒くて それもやだ

イ…オレは雪国 寒いのは大好き カマクラなどに 入りなさい

カ…新潟カマクラ あるの知らねえ 先生これまで 入ったこと

あるの

イ…あんた知らねえか 京大 京大 越後新潟は 雪国だ

この内容は、一回戦で梶丸氏が村田氏に「京大の学長」と呼ばれたことを承けてのやりとり。大会では、このように前の掛唄の話題を引き継ぐものもみられる。会場全体で歌の場が共有され、掛唄が展開してゆく一例といえる。

【4組目】 伊藤葵氏（イ）／後藤弘氏（ゴ）

イ…私酒が 好きなのよ こう見えてとても好き 飲みましょう

よ

ゴ…酒の好きな 彼女と会えて じっちゃんの喜び 飛び上がる

イ…ここで会えたのも 何かの縁ね 私も嬉しいわ お手柔らかに

に

ゴ…酒の縁とは 大切なれど 美人の彼女と 結ばれたよ

イ…唄がうまい あなたと掛けあえて ほれてしまいそうな ア

ラサーです

ゴ…美人のあなたは 声もきれいな 歌詞を作るのも 上手なあなた

【5組目】 中川原恵美子氏（エ）／村田定夫氏（ム）

エ…唄っこ好きでも 掛唄難しい 仙北荷方が うたえません

ム…毎日そばにいる だんなに聞けよ 掛唄なんて すぐわかる

エ…おらいの父さん 練習きらい 家では全然 うたわらない

ム…それは困った 父さん ほかさ行つて 教えてる

エ…聞いて覚えた 荷方の節よ 私の先生は みなさまです

ム…そうだみなさんのおかげよ それでも布団の中 中で聞いて

よ

24時38分 二回戦終了・審査

1時1分 一般の部・三回戦

【1組目】 伊藤葵氏（イ）／中川原信一氏（ナ）

イ…ここに来る前 あなたをみて 練習したよ 掛唄動画で有名な

人だ

ナ…それは嬉しい 話だけれど いくらか役立った 嬉しいな

イ…最高の手本だよ あなたの唄声は 憧れるな 歌詞もすてき

ナ…共に二人は 地元の仲間 今後活躍 祈ってる

イ…うたい継ぎたい この伝統を また来年も 来たいよ秋田で  
ナ…力強いよ あなたの言葉 共に励まし 続けましょう

【2組目】 中川原恵美子氏(エ) / 妻野敏夫氏(ツ)

エ…自然災害 怖い一言 復興進まず 暴走し  
ツ…台風災害で 停電続き あなたの实家は 大丈夫  
エ…南房総 おらがのふるさと 昨日電話が 通じたよ  
ツ…停電長引き 住民泣くよ 早く電気を つけてくれ  
エ…暮らし普通の ありがた気持ち つくづくありがとう 言っ  
てます  
ツ…普段わからぬ 電気や水道 いかに大事か わかります

【3組目】 高柳理乃氏(タ) / 後藤弘氏(ゴ)

タ…今は一時よ とても眠い 途中意識が 飛びかける  
ゴ…眠気さまそう あなたと共に 掛け合えば 眠気はしな  
い  
タ…唄をうたったら 少しさめた 掛唄とても 楽しいね  
ゴ…掛唄楽しく うたってゆけば 伝統掛唄 なお好きになる  
タ…作った歌詞では 味わえない楽しさ 即興掛唄 魅力的  
ゴ…好きになって 来年も掛けよう あなたをここで 待ちし  
ている

【4組目】 伊野義博氏(イ) / 村田定夫氏(ム)

イ…虫がいつぱい コップの中にも 飲んでしまった どうしよ  
う  
ム…のどが乾いて コップの虫に 伊野先生よ 生徒にもついて  
いる  
イ…オレの生徒は 女性ばかり 虫をはらうのに 追われている  
ム…トイレに行っても 虫に触れぬ 世の中の男に だまされぬ  
よう  
イ…虫も食わぬような 顔をしてるが 案外あの子らは 喰わせ  
者よ

ム…オレの見方は 先生と違う 悪い虫には 気を付けて  
1時40分 三回戦終了・審査

1時58分 一般の部・四回戦

【1組目】 中川原信一氏(ナ) / 妻野敏夫氏(ツ)

ナ…あくび出て来る 文句は出ない つらいものだよ 掛唄は  
ツ…兄貴の背中を 目標にして 追いつけ追い越せ 三十年  
ナ…そうだその意気だ オレだつて負けぬ 声をはりあげ うた  
います  
ツ…節は荷方だ その歌詞即興だ 声をはりあげ うたおうぜ

ナ…知恵を出して 歌詞をば作る これが掛唄 醍醐味だ  
ツ…掛けの魅力は 即興にあると 兄貴が教えて くれました

【2組目】後藤弘氏（ゴ）／村田定夫氏（ム）

ゴ…小泉結婚 来年大事 大臣なって 日本をよくする

ム…おやじ似ている 純一郎 生意気なしぐさは 好きではない

ゴ…口で走って 国民わかる 小泉大臣 日本のためと

ム…言葉ずらして 育児休暇 取るか取らぬか はつきりせよ

ゴ…国民にわかるよう 言葉のとおり 福島災害地に 次の日

出向き

ム…おやじまさりと 親バカおやじ 私は何とも 好きではない

2時17分 四回戦終了・審査

2時38分 一般の部・五回戦（お題有り）

この回は会場からテーマを募集し、審査員が各組のお題を決定するという形式で行われた。加藤義男氏からの聞き取りでは、お題を設定された方が掛け合いの難度は高くなるとのことであった。そのため、大会では後半戦でお題を決めて対決させる場合が多い。

【1組目】後藤弘氏（ゴ）／妻野敏夫氏（ツ）

☆お題「秋」

ゴ…秋は食欲 みなさん言うが わたしゃマツタケ 大好きです  
ツ…高いマツタケ とんでもないよ わたしゃシイタケ 大好きだ

ゴ…シイタケいつでも 食べられますが 秋はマツタケ 季節に合います

ツ…輸入のマツタケ うまくはないよ 国産シイタケ 最高だ

ゴ…秋田で一番の マツタケ雄物川 それを食べたら 外国は食

べれぬ

ツ…秋の食卓 シイタケ三昧 焼いたシイタケ 最高だ

ゴ…マツタケの吸い物 飲んだらや止めれぬ それに熱燗は マ

ツタケに合ってる

ツ…薄いマツタケ ちよっぴり入る 吸い物なんかは いらな

よ

【2組目】中川原信一氏（ナ）／村田定夫氏（ム）

☆お題「夜這い」

ナ…古希を過ぎたる 年寄りオレだ 夜這いなんかは 忘れたよ

ム…年じゃないよ 男と女の 二人会えば いけるよ

ナ…気持ち元気で 向かってみても 役に立たない 夜這いです

ム…どきどき はらはら そこがおもしろい 男と女が 結ばれ

る

ナ…年寄り無理して 夜這いをしても 体壊して 死ぬだけよ  
ム…待っている人 夜這いでいくよ だんなに見つからないよう  
部屋に入る

ナ…そんな危ない 夜這いはイヤだ オレはこっそり かかあに  
行く

ム…暗い夜に 隣のかかあに こっそり入って 仲良くする

3時3分 五回戦終了・審査

3時13分 一般の部・六回戦

本大会の最終回。最終回を一組だけの決勝戦として行っていた時  
もあったが、今回の大会では三回戦に勝ち残った四名で四・五・六  
回戦の対決を総当たり戦として行っていた。このような方式は、参  
加者の減少に伴うベテランの歌い手の減少が少なからず影響してい  
るものと推察される。

【1組目】妻野敏夫氏(ツ) / 村田定夫氏(ム)

ツ…日韓問題 出口が見えぬ どうすりゃ解決 するのかな

ム…もともと合わない ずるい韓国 小さな国で 生意気だ

ツ…互いを思う 気持ちがあれば 解決するのじゃ ないだろか

ム…日本をあてにして 金取ることだけだ 韓国やめた 方がよい

ツ…けんかするのは 簡単だけど それでは解決 なりません

ム…内輪もめも 韓国よ ジャパンは早く 捨てるべき  
ツ…やはり互いを 思つて話す それが解決の 近道だ  
ム…ジャパンの技術 みんな盗んで 日本をあてに してるだけ

【2組目】後藤弘氏(ゴ) / 中川原信一氏(ナ)

ゴ…来月増税 八から十へと 年金生活は ままにはならぬ

ナ…だれもやだよ 増税だけど これも国民の 義務ですよ

ゴ…国民を思つての 安倍総理 □ 社会保障と 暮らしがよくな  
るか

ナ…義務を果たして 日本を守る それがみんなの 務めなる

ゴ…金持ちの国民は 税金あがっても われみたいな 生活苦し  
いね

いね

ナ…それは誰でも 同じことだ 納めた税金 宝です

ゴ…われの生活 晩酌の □ 一杯でやめるのかい 酒税はダメだ

ナ…家族みんなで 協力しあい うまい晩酌 飲みましようよ

※□は聞き取れなかった箇所。

3時35分 六回戦終了・審査・表彰式準備

※優勝審査は神社の本殿内で行われる。(5時終了)

5時7分 一般の部 表彰式

優勝 妻野敏夫

優秀賞 中川原信一・村田定夫

優良賞 後藤弘・伊野義博

奨励賞 中川原恵美子・梶丸岳・伊藤葵

努力賞 木村テル子

新人最優秀賞 高柳理乃

新人優秀賞 風間さくら・小林優香

※敬称略

5時30分 調査終了

審査員 金澤八幡宮奉納伝統掛唄保存会会長 佐藤正晴氏

ほか会員5名

参加者…ジュニア 7名

N大学 9名

一般と大学関係者 12名（うち新人3名）

## 六 まとめ

本論は、奈良県立万葉文化館の一般展示室の「日本とアジアの歌」のコーナーで展示されている秋田県金澤八幡宮の掛唄について、現在の掛唄大会で用いられている「仙北荷方節」の基本的な理解を確認し、金澤八幡宮の掛唄の起源とされる「夜籠もり」の習俗に関する

情報を収集し、「夜籠もり」の習俗と神事、そして掛唄との関係を考察した。掛唄が神事や祭礼の日にならわられるものであったということ、「仙北荷方節」が本来的に祝歌としての性格を有していることは、必ずしも無関係ではないであろう。この祝歌と神事との結びつきは、現在では宵宮祭における奉納唄にみることができ。奉納唄は掛唄ではないが、八幡宮の祭礼への祝言や、改元のあった今年においては、新しい時代を祝福するめでたい内容を持つことにおいて、祝歌としての荷方節と神事との関係性は今なお保存されているといえよう。さらに、若い娘の良縁祈願としての「夜籠もり」の習俗が人びとに掛唄の場を提供する機会であったように、現在は伝統奉納掛唄大会がその役割を担っているといえる。ベテランの参加者たちの中には、普段はまったく荷方節をうたう機会はなく、この大会でしかうたわれないという方もいる。ここには、歌は非日常の場においてうたわれるものであるという認識が存在するのであり、まして他者と即興で歌を掛け合う掛唄は、そのような場の設定が必要であるということであろう。本論の後半では、今年度の伝統奉納掛唄大会の調査記録を報告し、歌詞の分析による掛け合いの技にも若干の言及を試みた。今後は、これらの歌詞分析などをおし、人間が〈歌を掛け合う〉という文化をいかにして獲得してきたのか、さらに調査を進めてゆきたい。

## 注

- (1) 大谷歩「秋田県金澤八幡宮「掛唄」の民俗行事とその文化的意義―奈良県立万葉文化館・一般展示室「日本とアジアの歌」における基礎調査―」(『万葉古代学研究年報』第十七号、二〇一九年三月)。
- (2) 金澤八幡宮は一時県社として「金澤八幡神社」とされた時期もあったが、本論では現行の「金澤八幡宮」に統一する。
- (3) 菅江真澄『月出羽道』仙北郡・巻十九(『秋田叢書』第十卷、一九三三年、秋田叢書刊行会)。
- (4) 菅江真澄『月出羽道』注3に同じ。
- (5) 秋田県教員委員会編『秋田県文化財調査報告書第二九二集 秋田県指定無形民俗文化財 金沢八幡宮掛け歌行事―文化財収録作成調査報告書―』(一九九九年)。
- (6) 加藤義男編『金澤八幡宮伝統掛唄 秋田県無形民俗文化財指定15周年記念誌』は「夜籠もりする娘さんの付き添いが、お国自慢の唄い合いから段々に八幡節・金沢節を経て掛け合いの節は大正の終わり(一九二〇)ころ「仙北荷方節」と決まる(現在の形)(二〇〇七年四月)とあり、宮崎隆氏は「掛唄」が明治になってから仙北の各地に流行し、かつ昭和期になって、現行の『掛唄』が成立したと概観している(『掛唄』の現代―秋田県仙北郡のうたがけ考―『日本歌謡研究』三十号、一九九〇年十二月)と述べている。
- (7) 『日本歴史地名大系』「月の出羽路」「秋田県の文献解題」(平凡社)。
- (8) 菅江真澄『小野のふるさと』の天明五年四月十日の野遊びの記述を引用する(引用は『秋田叢書』別集第四、一九三二年による)。
- やのあるし、花見にまからん、山ふみに行なんやといさなはれて、大なる桜の盛はけふ過てんと見へて、なかはは散たるをあふきて過行に、(中略)かくて神のおはします玉垣に入は、うちのみやしるをきよらかに作り奉りたるに、ぬざたいまつりてけり。こなたの舞とのに男集りて、つ、みうち、三のをこ、らちきてあそふ中に見しりたる男、手してまねきたるに入は酒す、め、さかなは、くき(川いをの名也)ますのいを、みな櫛のわか葉に盛わかちて、やにゐたらんよりは、たのしさいか、あらん、これこしめせくと持出たる男やかてゑひて、ひさおしたて、つらおしぬくひ戯をせり。野遊にやあらん(中略)老たる女手をうち出たるに、こ、らの人ゑひしれてうたふにあはせて、いとわかき女顔そむけて、「蛙なく野中のしみつ」とうたひ出れば、男女はな声にうたひつき、あらぬさまにほうしとり、つ、みならず、としは八七十にやならん女の、みつわさしたる腰のはし、雪をかさしたるかうへをふり、ふるひたる声にしはぶきく手を叩て舞ふに(下略)
- (9) 菅江真澄『月出羽道』注3に同じ。
- (10) 伊藤金之助「金沢八幡宮奉納伝統掛唄大会」『横手郷土史資料』第六十八号(一九九四年四月)。
- (11) 白田甚五郎「山田白滝」『天人女房その他 昔話叙説Ⅲ』(一九七三年、桜楓社)。
- (12) 北嶋泰治「金澤山八幡神社掛唄について」(『横手郷土史資料』五十一号、一九七七年六月)。
- (13) 福田久四郎「金沢の八幡様の掛唄由来記」『金澤八幡宮伝統掛唄秋田県無形民俗文化財指定15周年記念誌』(加藤義男編、二〇〇七年四月)所収。この文献は、『羽後公論』七月号(一九六四年)により転載したとある。
- (14) 秋田県教員委員会報告書 注5に同じ。以下、「秋田県教育委員会」の報告は、すべて本書からの引用による。引用末部に頁数を付す。
- (15) 『奥羽地方の松坂とにかた節(附)なかをくにと祭文松坂 謙良節と検校節』(日本放送協会編『日本民謡大観 東北篇』一九五二年、

- 日本放送出版協会）。
- (16) 『秋田県史』第十卷「年中行事・民俗芸能」（『秋田県史 民俗工芸編』一九六二年）。
- (17) 佐藤長太郎「民謡概説」（『日本民謡全集二 北海道・東北編』一九七五年、雄山閣）。
- (18) 日本放送協会編『復刻 日本民謡大観 東北篇』現地録音・CD解説（一九九二年 日本放送出版協会）。
- (19) 『復刻 日本民謡大観 東北篇』注18に同じ。
- (20) 辻純一「民俗行事 荷方節かけあい合戦 熊の宮 かけ唄」（『北方風土』一号、一九八〇年七月）。
- (21) 菅江真澄『月出羽道』注3に同じ。
- (22) 赤松啓介『夜這いの民俗学』（一九九四年、明石書店）。
- (23) 『精選 日本民俗辞典』「十三参り」の項・佐野賢治担当（二〇〇六年、吉川弘文館）。
- (24) 宮崎隆「『掛唄』の現代―秋田県仙北郡のうたがけ考―」（『日本歌謡研究』三十号、一九九〇年十二月）。
- (25) 齋藤壽胤「羽後のうた掛け」『講座日本の伝承文学第七巻 在地伝承の世界【東日本】』（一九九九年、三弥井書店）。
- (26) 齋藤論 注25に同じ。
- (27) 宮崎隆編「宮田熟穂資料 昭和初期の『掛唄』蒐集ノート」（一九九九年）。
- (28) 藤田秀司「金沢八幡神社の掛け唄」の末尾・編集部の記事（秋田県文化財保護協会編『出羽路』一一四号、一九九五年八月）。
- (29) 日本放送協会編『日本民謡大観 東北編』（一九五二年、日本放送出版協会）。
- (30) 『復刻 日本民謡大観 東北篇』注18に同じ。
- (31) 加藤義男編『金澤八幡宮伝統掛唄秋田県無形民俗文化財指定15周年記念誌』（二〇〇七年四月）。
- (32) 藤田論 注28に同じ。
- (33) 『15周年記念誌』注31に同じ。
- 〔付記〕本論を著すにあたり調査にご協力いただき、また貴重な資料をご提供いただきました、金澤八幡宮伝統掛唄保存会顧問の加藤義男様、熊野神社の熊谷暁様・熊谷真利様に、厚く御礼申し上げます。